

令和5年度小平市立小平第十一小学校～「全国学力・学習状況調査」結果概要～

1 調査目的・対象

児童・生徒の学力や学習状況を把握・分析し、成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、今後の児童・生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てるための調査です。

2 調査内容

(1) 教科に関する調査

身に付けておこななければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等、また、知識・技能を実生活の様々な場面で活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等に関することを児童が答える調査です。

(2) 生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査

学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関することを児童が答える調査です。

3 各教科の調査結果の分析

【国語】

状況の分析

東京都平均と比べ、話すこと・聞くことの領域では9.1ポイント、読むことの領域では2.5ポイント上回った。一方、書くことの領域では1.0ポイント下回った。観点別では知識・技能で3.4ポイント、思考・判断・表現で4.8ポイント上回った。

課題

全体的に正答率が高いが、書くことの領域での正答率が低かった。資料を読み、そこから分かったことを自分の言葉で書き表すことに難しさを感じている児童が多いと分かった。今後、授業の中で文章表現の活動や意見交流の活動などを充実させていく必要がある。

学校で取り組む具体的な改善策

家族や友達に贈りたい一字を選び、気持ちを文章にまとめる「漢字チャレンジ」に全校で取り組んだり、低学年で「せんせいあのね」等の日記の活動を習慣化したりして、気持ちや考えを書き表す活動を充実させる。また、新しい内容や授業時間の始めの短時間で、本時の活動につながる「1分間スピーチ」「味見読書」「音読」などに継続して取り組み、日常的に楽しみながら言語感覚を豊かにする活動を取り入れる。また、ICTを活用した学習や学校生活の振り返りの記入を日常的に行い、表現の幅を広げられるように指導する。

【算数】

状況の分析

東京都平均と比べ、数と計算の領域では3ポイント、変化と関係の領域では1.2ポイント、データの活用の領域では2.4ポイント上回った。一方、図形の領域では1.6ポイント下回った。観点別では、知識・技能で2.3ポイント、思考・判断・表現で0.1ポイント上回った。

課題

図形の領域の問題の中でも、正三角形の性質や、高さの等しい三角形の面積の大小を問われる問題の正答率が低かった。図形それぞれの性質を正しく理解することや、それらを自らの言葉で表現したり説明したりする活動の習熟を図る必要がある。

学校で取り組む具体的な改善策

学習支援アプリを活用し、全員の意見や考えを教室全体で共有させることで、友達の考えをヒントにして自分の考えを深めたり広げたりできるようにする。また、図形を取り扱う学習では、具体的な数値が示されていない場面において、問題を解決する際に必要な情報を主体的に見いだしたり、適当な数値を当てはめたりして考えることができるように指導を行っていく。また、計算や作図、問題解決の過程を自分なりの言葉で表現し伝え合う活動を多く取り入れることで、表現の仕方を知り身に付けられるようにする。

東京都平均と比較して、国語・算数・英語の学習が将来役に立つと肯定的に捉えている児童の割合が多く、学習することの大切さを実感している児童は多い。また、将来の夢や目標をもっている児童も多く、自分の将来に対して具体的に考え、前向きに捉えることができている児童も多いことがうかがえる。

東京都平均と比較して、読書を好む児童が少ないこと、家で自分で計画を立てて学習する傾向が低いことが分かった。学んだことを次の学習に生かせるような振り返りや、自主的に読書や学習が進められるような働きかけの工夫をしていく。また、学習者用端末を活用した学習を充実させ、話し合い活動等に活かせるように。

学校で取り組む具体的な改善策

週に一度の朝読書の時間に加え、読み聞かせやビブリオバトルなど、全校での読書に関わる行事を通して読書活動を啓発していく。また、校内で目標を設定し、達成した児童を表彰することで児童が意欲的に読書に取り組めるようにしたり、学習者用端末を用いたデジタル読書の環境も整えることで読書に触れる機会を充実させたりする取組を進めていく。

家庭学習については、児童一人一人の学習についての課題や目的を明らかにさせ、意図をもって家庭学習に取り組ませる。特に、自主学習について自分のテーマ追究や課題克服など、自分なりに考えた学習内容・方法を尊重し、進めさせていく。テーマや課題が決まらない児童に対しては、取り組みやすいテーマを提示したり、今後の学習の見通しをもたせたりすることで、習慣化を図っていく。また、今年度は計算ドリルを学習者用端末で取り組むデジタルドリルにし、児童が家庭学習で自分に合わせて活用できる環境を整えている。